社会科学習指導案（歴史的分野）

１　単元名　「武士の成長と武家政権の成立」

２　単元の考察

変貌する未来を切り拓くための力を育むためには、「深い学び」を通じた思考力・判断力・表現力等の育成が欠かせない。歴史的分野においては、個別の社会的事象についての知識を身に付けさせるだけでなく、事象間の関連などから社会や時代を認識させる力を育てたい。本単元で扱う日本の中世は、武士が政権を担っていた時代ではあるが、朝廷も権力を保持し、寺社や農村も武力を持つような特色がある。すなわち近世の統一権力による惣無事の世界とは違い、鎌倉幕府や室町幕府が絶対的な権力を持っていたわけではないのである。このような中世の時代的な特色を考察することは中学一年生段階では極めて難しい。そこで、本単元では頼朝による鎌倉武家政権の成立までを１つの区切りとして、日本の中世は武士が政権を担っていたという古代とは異なる特色に焦点を当てた単元を設定した。新学習指導要領において中世の武家政治の特徴を考察することが狙いのひとつとされていることを受け、鎌倉幕府成立時の武士たちの様子や主従の結びつきに焦点を当てた単元を構成することが有効であると考えた。その中で上記の時代的特色を生徒に理解させるために、鎌倉幕府が朝廷から独立した組織であり、官職の任命などの影響を受けにくくするような頼朝の意図があったことに気づかせたい。さらに「深い学び」に向かうための足がかりとして、地域教材を通して生徒の興味・関心を高めることも必要な手立てである。本単元では、現在の千葉市を本拠とした武士である千葉氏を題材として、鎌倉幕府成立の背景とその特色に迫っていきたい。

9 世紀後半以降、律令制の維持が困難になると、地方の支配はほぼ全面的に国司に委ねられるようになった。租税で私腹を肥やすなど国司による横暴な政治が一般化したり、任国に目代を送り収入だけを得たりする国司も多くなった。次第に地方の政治は乱れていき、地方豪族や有力農民には、領地を守るために武装する者も現れていった。一方、都では武芸に優れた武官が警備や治安維持などにあたっていた。そして天皇や貴族に認められたり、地方で婚姻関係を通じて勢力を広げたりと、都と地方とを往復しながら徐々に地位を高めていった。このようにして武士がおこり、成長していったと考えられている。やがて地方の武士は土地開発と領域支配を進める中で、有力武士と主従関係を結び、武士団を形成していった。中でも清和天皇の子孫である源氏や、桓武天皇の子孫である平氏は有力な武士団であった。もともと坂東では桓武平氏が土着化し勢力をふるっていたが、11 世紀後半には前九年合戦・後三年合戦が起こり、これをしずめた源氏の源義家が東日本に勢力を広げていった。武士団は朝廷とのつながりを深めると、保元の乱や平治の乱といった朝廷内部の争いを経て武士が政治的にも大きな力を持つようになった。平治の乱後は平氏が政権を握ったが、治承・寿永の内乱（いわゆる「源平の争乱」）を経て、源頼朝が本格的な武家政権である鎌倉幕府を成立させた。

では、この頃の房総半島はどのような様子だったのだろうか。房総では千葉氏や上総氏などいくつかの武士団が力を持っていたが、ここでは本単元で中心的に扱う千葉氏を軸に述べていく。千葉氏は、11 世紀前半に房総で反乱を起こした平忠常に繋がる一族である。1126（大治元）年、忠常の玄孫にあたる常重が千葉荘に本拠地を移し、在地領主として「千葉介」を称したのが始まりである。常重は、祖先が獲得した下総国相馬郡の領地を伊勢神宮に寄進し御厨とした。これは、国司や他の領主から領地を守るための動きであったと考えられる。しかしこの後、相馬御厨は下総守藤原親通や源義朝によって介入を

受ける。相馬郡の公田から官物が未進であることが理由とされたことから、常重の子である常胤は莫大な財貨を国に納め、所領の返還がかなうと相馬の地を再び伊勢神宮に寄進した。義朝との間では、保元の乱に際して主従関係を強化することで、相馬御厨をめぐる確執の解決が図られたと考えられている。しかし平治の乱で義朝が討たれると、相馬御厨は国衙に没収された。一度は常胤の働きかけで伊勢神宮への寄進が認められたものの、最終的には中央権力とつながりの深かった源（佐竹）義宗の支配が認められ、常胤は相馬御厨を手放すことになった。さらに、他の多くの領地も失い、千葉氏の地位は相対的に低下することになった。

1180（治承 4）年、源頼朝は伊豆で以仁王の令旨を受けて打倒平氏の兵を挙げたが、石橋山の戦いに敗れ、房総半島に逃れた。頼朝は立て直しをはかるために有力武士に呼びかけ、これに応じてすぐ加勢を決めたのが常胤である。千葉氏は平家方の下総目代を攻撃し、同じく平家方の下総守藤原親政を破った。常胤の進言で鎌倉に入った頼朝軍は、富士川の戦いで平氏方の軍勢を破ると、直ちに上洛しようとした。これに対して常胤は、平氏方の佐竹氏を攻撃するように進言し、頼朝はそれに応じた。このような動きには、常胤と頼朝それぞれにとってどのようなねらいがあったと考えられるだろうか。平治の乱以後、地位を低下させていた常胤としては、頼朝の挙兵を一族にとっての勢力拡大の機会と捉えた。実際、相馬御厨などの領地をめぐって千葉氏を圧迫していた藤原氏や佐竹氏を押し返し、下総各所をはじめとした各地の領地を幕府によって安堵された。一方で武力が限られていた頼朝にとっては、平氏打倒のために、東国武士団の要請を受け入れ権益を守ることが不可欠であった。千葉氏（平氏）の要請を受け、佐竹氏（源氏）を攻めていることからも、家系が清和源氏か否かではなく、利害関係が一致するかどうかが、東国武士団との結びつきの上で鍵となっていたことが分かる。こうして頼朝は個々の領主権を安堵することで、東国に成長した武士を支配下におさめていき、覇権を確立した。さらに朝廷との関係において、官職を手にした者を罵倒するなど武士と朝廷との接近を警戒する姿勢を貫きつつ、段階的に朝廷から自立した政権を築いていくことに成功した。

以上を受け、本単元を次のように構成した。第一時では、絵画資料や漫画から武士の発生を読み取る。地方の反乱を鎮めるために行使された武力が次第に都での権力争いの解決手段としても行使されるようになる(事実的認識の第 1 段階)。この過程で武士も政治の世界に加わっていくことに気づかせ、貴族から武士へと時代の中心が移り変わっていく様子を理解させる(事実的認識の第 2 段階)。第二時では、千葉常胤の相馬御厨の活動を例に挙げる。相馬御厨は、千葉氏の所有する土地であったが、国司や源義朝・佐竹義宗などによって土地を奪われてしまうことがあった(事実的認識の第 1 段階)。そのために、上級貴族や寺社などに寄進し、自分の土地を命がけで守る必要があったことを認識させる(事実的認識の第 2 段階)。本時にあたる第 3 時では、頼朝挙兵から富士川の戦いまでの様子を扱う。富士川の戦い後、頼朝軍が京都に攻めあがらず東国の基盤固めを行った一連の流れを理解する(事実的認識の第 1 段階)。そのうえで、吾妻鏡をもとに考察を加え、治承・寿永の乱が、「源氏対平家」というような単純な構造ではなかったことを理解し、当時の主従関係が互いの利害の一致によって結ばれた契約関係であったことに気づかせたい(事実的認識の第 2 段階)。第四時では、平家滅亡後に義経が頼朝の許可なく勝手に朝廷より任官されたことに厳しい態度をとった一連の流れをつかむ(事実的認識の第 1 段階)。この事例より、頼朝が何よりも東国武士団に規律を求めていたことに気づかせたい(事実的認識の第 2 段階)。そして、それは鎌倉幕府が武士たちを朝廷の支配から切り離し、武士の権益(土地)を守るための自立した組織を作るためであったという頼朝の意図があったことを認識させ(事実的認識の第 3 段階)、中世武家政権の特徴を捉えさせたい。

３　単元の目標

・千葉氏を中心とした鎌倉時代成立期の事象に興味を持ち、意欲的に意見を出して課題に取り組むことができる（関心・意欲・態度）。
・千葉氏を中心とする事象から、武家政権が武士の権益を守るための独立した組織であったという特色を把握し、自分の言葉でまとめることができる（思考・判断・表現）。
・年表や図、歴史史料から、鎌倉時代成立期の武士団の動きや荘園についての情報を読み取ることができる（技能）。
・武士の発生～富士川の戦いまでの政治的・社会的な歴史的事象について理解することができる（知識・理解）。

４　指導計画と授業構成

（１）指導計画

時	学習内容と目標	指導上の留意点
1	○武士はどのように起こり、成長していったのだろう ・平治物語絵巻の武士が貴族を追い立てている様子より、時代の中心が貴族から武士に移り変わっていくことを掴ませる ・武士の成長を年表にまとめ、地方の反乱を鎮めるためだけでなく都での権力争いに武力が使われたことに気づかせる	・平治物語絵巻の武士が貴族を追い立てている様子に着目させる ・年表にまとめた後に、各出来事が起こった場所に着目させる
2	○千葉氏はどのように誕生し、力をつけていったのだろう ・荘園の領主と寄進先をまとめた図より、寄進先が変わらない一方で次々と領主は変わっていく点に気づかせる。 ・千葉氏がなぜ相馬御厨にこだわったのか考察する	・荘園の領主と寄進先をまとめた図より、寄進先と領主に着目させる ・千葉常胤の相馬御厨への行動に着目させる
3 本 時	○千葉常胤と源頼朝はどのような関係だったのだろう ・「12 世紀の東国」の図より、千葉常胤のような平氏も頼朝に従っていたことに気づく。 ・資料をもとに源頼朝と千葉常胤の関係について、千葉常胤が求めていたこと、源頼朝が求めていたことをそれぞれ考えさせ、考察する	・千葉常胤のような平氏も頼朝に従っていたことに疑問を持たせるように支援する。 ・うまく、まとめられない生徒がいた場合、前時の相馬御厨の話に触れ、関係を導けるように支援する
4	○源頼朝は、なぜ義経に厳しい態度をとったのだろう ・源義経の行動を資料より読み取り、平家滅亡や守護・地頭の設置、奥州藤原氏の滅亡に関与した事実を掴む ・義経が頼朝の許可なく朝廷から任官したことに対する頼朝の態度から、頼朝が作ろうとした政権の特色を考察する	・教科書や資料集を使用し、穴埋めができるようなワークシートを作成する。 ・後白河上皇から、頼朝の許可なく義経が勝手に任官した事実に着目させる

(２)指導構成

第１時では、平治物語絵巻の読み取りを単元全体の導入とする。絵画資料より、貴族の館を武士が襲撃している姿を読み取り、時代の中心を貴族より武士に移り変わっていく様子に気づかせたい。武士が時代の中心になっていくことを捉えさせたうえで、「武士はどのように起こり、成長していったのだろう」という学習課題を提示する。漫画「平将門」より、地方の乱れを読み取らせる。また、春日権現験記絵より都に武官という職能集団がいたことを見つけさせる。地方の武装化した人々と都の武官の交流を通して武士が発生したことを教科書から確認していく。次に武士が政治に影響力を持つにいたる経緯をあらわした年表を資料集より作成させ、理解を深めたい。

第２時では、千葉氏の所領である相馬御厨を扱う。千葉氏について興味を持たせるため、「千葉」という名字の芸能人の写真やどこの都道府県に多いかという話題をきっかけに千葉氏が鎌倉時代を通して全国に広がっていったことを導入として扱う。ここで「千葉氏はどのように誕生し、力をつけていったのだろう」と学習課題を提示する。展開の前半部では、武士団について千葉氏を通じて理解させる。続いて、千葉氏の所領である相馬御厨を扱う。相馬御厨を領有していた人名をまとめた資料をもとに、相馬御厨の領有権が頻繁に移り変わっていることや領有権を確かなものにするために領地を伊勢神宮に寄進していることなどを読み取らせる。常胤の相馬御厨に対する活動を通して一所懸命という考え方に気づかせ、授業の終わりに常胤の気持ちを表現させる。

第３時では、生徒に知っている武士の名前を挙げさせ、名字と姓の違いを説明し千葉氏が平氏であることを伝え、「平氏である千葉氏が源氏である源頼朝に味方することはおかしい」という疑問を持たせることを導入として扱う。ここで、「千葉常胤と源頼朝はどのような関係だったのだろう」という学習課題を提示する。ワークシートを配付し、関東地方には何氏が多いのか確認し源氏が少ないことや各氏が地域ごとにまとまっていることを読み取らせる。次に、漫画「千葉常胤物語」の一部を読み、源頼朝の挙兵から富士川の戦いまでの流れを年表にまとめる。富士川の戦いの後、源頼朝が京都を攻めなかった理由を漫画の一場面を利用し、セリフを考えさせ千葉常胤の考えを自分なりに表現させる。授業のまとめとして、挙兵当初の源頼朝は絶対的な権力者ではなく、千葉常胤に代表されるような東国武士たちの意見を聞くことで権力を保ち、相互補完の関係にあったことに気づかせたい。

第４時では、源義経の行動を事例に授業を展開する。導入で義経の人物画を使用し、知っていることを自由に聞き出す。壇ノ浦で平氏をやっつけることや悲劇の最期を迎えることになったことについては生徒から出ることが予想されるため、展開を二つに分ける。前半は、義経の活躍を年表にまとめ、義経が戦の達人であったことに焦点を当てる。後半部分では、平氏追討後の義経は没落の一途に焦点を当てる。義経の栄華と没落、この間に何があったかを考えることで頼朝が義経を含めた御家人たちに何を求めていたのかを考察させる。頼朝は御家人たちの勝手な任官を防ぐことで、武士たちを朝廷の支配から切り離し、御家人たちの権利を守ろうとしていた意図に気づかせたい。そして、単元の終わりに、源頼朝が作った鎌倉幕府は、今までの政権とは異なり武士の権益（土地）を守るための自立した組織であったことを生徒一人一人が認識できるような単元にしたい。

5　本時

1　題材名　　千葉氏と源頼朝

2　目標

・千葉常胤と源頼朝の行動に興味を持ち、課題に対して意欲的に意見を出し合うことができる。
（関心・意欲・態度）

・富士川の戦い後に源頼朝が関東の経営を中心に行った理由について、頼朝と東国御家人の関係をふまえてまとめることができる。（思考・判断・表現）

3　展開

時配	学習内容と生徒の活動	留意点（○）および評価（◇）
導入	●源氏や平氏などの当時の武士団について ・木簡を見て、傍線部の名前を答える。 予想される生徒の反応 時政　平朝時政　北条時政　など ・名字は姓と違うことを確認する（多くが四姓（源平藤橘）を源流とする） ・千葉氏の姓は何かを予想し、発表する 【予想される生徒の反応】 多くが源氏であると予想 ●学習課題を把握する	○文治二年北条氏を大型テレビで表示する。 ○生徒の手元にも、木簡のコピーを配布する ○生徒が意見を言いやすいような雰囲気を意識する ○人数を挙手により確認する
	千葉常胤は、なぜ源頼朝の味方をしたのだろう。	
展開	●鎌倉時代成立期の武士団の配置について確認する ・関東地方には何氏が多いか、地図から確認する。 ・平氏がいろいろなところに広がっている ・伊豆には平氏が多い、千葉県に平氏が多い ・源氏が少ない　など ●源頼朝挙兵からの流れを漫画で確認する（「千葉常胤公物語」P12～25上部分） ・漫画を読みながら、年表に記入していく ・何人かの生徒に発表させる 【年表の穴の部分】 ①合戦の場所：石橋山 ②合戦の結果：負け ③源頼朝が戦後行った場所：房総半島 ④千葉常胤 ⑤上総介広常 ●源頼朝が京都を攻めなかった理由を考える	○ワークシートを配付する ○源氏は□、平氏は●など確認し、分布の特徴をつかみやすくする ○資料（「千葉常胤公物語」P12～25上部分）を配付する ○事前に録画した漫画の映像を見せ、時間をかけないようにする ○漫画「千葉常胤公物語」の一コマを黒板に提示する

	・漫画「千葉常胤公物語」の一コマを取り上げる ・漫画で千葉常胤の空白のセリフを考える ・個人で考えた後、4人組を組んで意見を出し合い、一つにまとめる。まとめたものをホワイトボードにまとめ、黒板に貼りに来る。 予想される生徒の反応 ・京都まで行く必要はないでしょう ・まだ佐竹が帰伏していません ・一度自分の領地に帰りましょう　など	○ワークシートに載せた吾妻鏡の書き下し文を参考にセリフを考えさせる。 ◇状況に適したセリフを記入することができたか ○書くことが困難な生徒に対しては、机間指導を行う ○うまく書けていない生徒がいた場合、「佐竹」を前時に触れたことを口頭で伝え、思い出させる。
	・千葉常胤が京都を目指すことに反対した理由を考える ・4人組のまま活動を続ける 予想される生徒の反応 ・佐竹がまだいたため(相馬御厨を取り返したい) ・千葉常胤の目的は「打倒平家」ではなかった ・自分の土地を守ることや新しい土地をえることが東国武士団の目的だった　など	◇資料をもとに千葉常胤の行動について、意見を考えることができたか
まとめ	・口頭で発表する ●この後、頼朝が京に上らずに東国経営に専念した理由を考える 予想される生徒の反応 ・千葉常胤たちは、打倒平氏のために頼朝に協力したわけではなかったから ・まだ頼朝に平氏を倒す力がなかったから ・東国武士団は、上京よりも自分の土地の方が大切だったから ・頼朝の力が絶対的なものではなかったため、東国武士の意見を聞きながらでないと権力は維持できなかったから　など	○数名の生徒にワークシートにまとめたことを発表させる ○頼朝と千葉常胤たち東国武士団との関係性に焦点を当てて考えさせる ◇源頼朝と東国武士団の関係についての視点に焦点を当てて考えることができたか
	・黒板に書いて発表する	○数名の生徒にワークシートにまとめたことを黒板に書かせる

評価

・千葉常胤と源頼朝の行動に興味を持ち、課題に対して意欲的に意見を出し合うことができたか。

（関心・意欲・態度）

・富士川の戦いの後、頼朝が東国経営を中心に行う決断をした理由を、千葉常胤と頼朝の関係を参考にして考えることが出来たか。（思考・判断・表現）

６　本単元における思考の構造図

【事実的認識の第３段階】

鎌倉幕府は、武士の権益（土地）を守るための自立した組織として成立した。

↑

【事実的認識の第１・２段階】

Ａ．平安時代末期から武士が誕生し、その武力を背景に次第に地方政治だけでなく、中央（朝廷）の政治に対しても影響力を強めていった。

ａ．１０世紀になると、豪族が開墾した私有地を領地として広げていた。
ｂ．都では朝廷の武官が武芸を磨き、貴族の身辺や屋敷の警備を行っていた。
ｃ．地方の豪族と中央の武官との交流の中から武士がおこったと言われている。
ｄ．武士は武士団を形成し、本家を中心とする大武士団を構成していった。
ｅ．武士の中には、平将門や藤原純友のように朝廷に反乱を起こすものもあらわれた。
ｆ．地方の反乱に対して、朝廷も武士団の力を利用して対応をしていた。
ｇ．平安時代後期に政治の実権をめぐる争いから、保元の乱や平治の乱が起こり、平清盛を中心とする平氏政権が誕生した。

Ｂ．武士は所領を守るため、寺社や公家に寄進していた。しかし、国司や他の武士団と土地をめぐって争いに発展することもあった。

ａ．１１２４年、千葉常重は平常晴から相馬郡を譲られ、その後郡司となる。
ｂ．１１３０年、千葉常重は「相馬郡布施郷」を伊勢神宮に寄進し、その寄進は下総守からも正式に認められ、その土地は「相馬御厨」と呼ばれるようになった。
ｃ．相馬御厨の官物未払いなどの問題から、下総守藤原親通や源義朝の介入を受けるようになった。
ｄ．千葉常胤は保元の乱で源義朝の家人として戦いに参加した。
ｅ．平治の乱の後、佐竹義宗が藤原氏から相馬御厨の文書を手に入れ、相馬御厨を伊勢神宮に寄進したため、千葉氏と佐竹氏の争いに発展した。
ｆ．千葉常胤は源頼朝に味方をし、下総の目代を討ったのち下総守藤原親政と戦った。
ｇ．富士川の戦いの後、千葉常胤は源頼朝に相馬御厨の権益を持つ佐竹氏討伐を進言した。

C．源頼朝が京都を攻めなかったのは、千葉常胤や上総介広常などの武士の意見を取り入れて東国経営を優先したためである。

a．平治の乱後、源頼朝は伊豆に流され、北条時政の娘の政子を妻とした。
b．平氏のやり方に不満が高まったため、諸国の武士が兵をあげ、源頼朝も挙兵した。
c．源頼朝の挙兵をうけ、下総国の目代を襲撃した。
d．房総半島に来た源頼朝を千葉常胤は上総介広常とともに迎えた。
e．富士川の戦いに勝利した源頼朝は京都に攻め上がろうとしたが、千葉常胤と上総介広常が諫めた。
f．富士川の戦い後、源頼朝は千葉常胤と上総介広常の意見を聞き、佐竹氏を攻めた。
g．千葉常胤が佐竹攻めを主張したのは、相馬御厨をめぐる利害関係が関係していると言われている。

D．源頼朝は武士たちを朝廷の支配から切り離し、鎌倉に幕府をおいた。そのため、武士たちが朝廷から勝手に官職を受けることを厳しく咎めた。

a．１１８２年に改元され、元号が養和となるが、源頼朝は治承を使用し続けた。
b．平氏を倒すために源義経が西日本に送られ、壇ノ浦で平氏を攻め滅ぼした。
c．壇ノ浦で平氏を滅ぼしたあと、多くの武士が朝廷から官職を手に入れた。
d．源頼朝は武士が勝手に官職をもらうことを厳しく咎めた。
e．官職を勝手にもらった源義経は頼朝から追討を受け、奥州藤原氏のもとへ逃げていった。
f．１１８５年、源義経をとらえるため、国ごとに守護、荘園や公領ごとに地頭を置くことを朝廷に認めさせた。
g．源頼朝は千葉常胤を東海道方面の大将として、奥州藤原氏を攻め滅ぼした。